

今日の福音書は、イエス様がエルサレムの神殿で、両替人や鳩を売る者たちに対して、怒りをあらわにされた、いわゆる「宮きよめ」の出来事です。時期は過越祭という、ユダヤ人にとっては、自分たちの先祖が、昔エジプトの地からモーセによって解放された、そのことをお祝いする、春の大きなお祭りの時でした。お祭りには、人々は献金や動物のささげ物をするために、エルサレムの都にやってきました。

神聖なエルサレムの神殿では、汚らしい外国のお金は受け付けてもらえない、ということで、イスラエルのお金に換えるために、両替ということは、どうしても必要なことでした。また、神殿での礼拝は、動物をささげることが中心でした。そのために、遠いところから動物を連れてくるのは大変ですから、神殿に来て、ささげる動物を買う、というのも、あたりまえのことでした。

それなのに、どうして、イエス様は、この人たちを批判して、騒ぎをおこすことになったのでしょうか？

よく言われる説明には、この両替人や動物を売る人々が、不当なほどの高い利益を得るために、お客を食い物にしていた、という批判です。しかし、これらの商売をしている人々の利益の一部が、神殿の運営のために使われることになっていた、と聞きますと、そんなに批判ばかりしなくてもいいではないか、という見解もあります。

そんな理由よりも、もっと大きな理由がありました。イエス様が怒ったのは、彼らの商売の内容ではなく、商売の場所が問題だったのだろう、とされています。

神殿は、立派な建物と、それを取り巻く庭で構成されていました。そして、この庭は、いくつかに分けられていました。エルサレムの神殿の建物に入るためには、そのいくつもの庭を通して、中に入らなければなりません。一番外側には、異邦人の庭というのがありました。外国人がこの神殿に入ることができるのは、この異邦人の庭までです。その庭を通り抜けてその内側に、婦人の庭があります。ユダヤ人の女性が入れるのはここまででした。その庭を通過して、中に入ると、イスラエル人の庭があります。イスラエル人つまりユダヤ人男性はこの庭まで入れますが、その先には、祭司の庭があり、そして神殿の建物では祭司たちだけが当番に応じて、ここで仕事をするわけです。

そのような、いくつもの庭に取り囲まれて、エルサレムの神殿は建っていました。

さて、それでは、イエス様が縄で鞭を作って、商売人を締め出したのは、どこだったのでしょうか？

これは、一番外側の異邦人の庭でした。この庭は、だれもが入れる、一番商売に適した場所だったのでしょう。しかし、見方を変えるなら、外国人が、エルサレムまでやってきて、神殿でお祈りしようとした時、唯一その外国人が入れる祈りの場は、この異邦人の庭だったのです。

このヨハネによる福音書は、商売人を追い出す時のイエス様の言葉を「このような物はここから運び出せ。わたしの父の家を商売の家としてはならない。」と書きとめています。

しかし、最初にできた、マルコによる福音書は、もっとはっきりとイエス様の怒りの根拠が書き残されています。

「こう書いてあるではないか。『わたしの家は、すべての国の人の祈りの家と呼ばれるべきである。』ところが、あなたたちは それを強盗の巣にしてしまった。」

どうも、強盗の巣という、後半の言葉が気になりますが、大切なのは、「異邦人の唯一の祈りの場を、祈れないような商売の場所にしてはいけない。」ということなのだろうと思います。

さて、このことから、わたしたちは何を学んだらいいのでしょうか？

鹿児島教会では、会衆席は伝統的な、みんなが前を向いた椅子の配置になっています。宮崎も延岡もそうです。ところが私は以前住んでいた宗像教会では、車いすの人や、他にも高齢で立ったり座ったりするのが難しい人がいるので、礼拝で使う、祈祷書や聖歌集、聖書日課、週報などを開いたり、持ち替えたりするのは面倒だと判断して、食事の時に並べるテーブルを、祭壇を囲むように、「コ」の字型に並べて、みんなの顔がお互い見えるようにしました。どうも現在は元に戻ったようなのですが。

礼拝堂の配置を変えて、テーブルを並べたことを、数日後に私の友人に電話で話しました。わたしが、「礼拝に早く来た人々が、今までなら、席についている人の所へ行って、片方は立ったままで話をしていたが、椅子の配置を変えて、テーブルもそれに添っておくと、お互いの顔が見えるからか、それぞれの椅子に座ったままで、会話を始めて、楽しく談笑していた。」と言ったのです。

するとその友人は、「うちの教会では、礼拝に来たら、誰も話なんかしませんよ。」と言うのです。それで、礼拝前に話をするのは悪いことだったかなあと思い直して、「ああそうですか。祈るために、礼拝に来ているのに、話しかけるのは、他の人の祈りの邪魔になるというわけですね。祈りの場所を商売の場所にするようなことなんではなかねえ。」と、わたしが言うと、友人は、「いや、そうじゃない。みんな、口をきかなくて、よそよそしいんですよ。」と言われるのです。

それで、「共同体の祈りの場」というのは、やはりお互いの顔が見えるような配置になっている方がいいのかなあ。それなら、今日の福音書でのイエス様の怒りを、現代の私たちはどのように、受け取ったらいいのだろうか、と考えたことがありました。

今日の旧約聖書には、モーセがシナイ山で十戒を授かったことが、記されています。これがユダヤ人たちの律法の基礎になったものです。

エジプトでの奴隷生活から解放して、大勢のイスラエルの人々を連れて来たモーセに、神様は、人間がどのような生き方をしたらいいのか、この十戒を通して教えられました。それは、人間が神様を自分の生活の中心に置いて、それ以外の物を拝まない、とか、安息日を大切にして、その日は普段の仕事から解放されるということ。そしてまた、人間同士が、お互いに相手を尊重しあう、愛の共同体を作ってゆく、という教えでした。これによって、神様と人間、そして人間同士の関係が、愛によって一致するはずでした。

ところが、モーセが律法を授かってから、1300年余り。すべての人のために和解の道が開かれていたはずなのに、エルサレムの神殿は、外国人を隔ての壁で分けてしまい、異邦人が祈れない神殿になってしまっているじゃないか、というのがイエス様の主張だったと思うのです。

本来、愛し合うために作られた律法が、人々を分け隔ててしまう、という矛盾をイエス様が怒られたこと。これと似たようなことが、私たちの周りにもあるのではないか、考えてみてください。

今日は、「在日韓国・朝鮮人差別を共に考える日」となっています。

万民の父、正義の源である神よ、御子イエスは、虐げられ、蔑まれた者に喜びのおとずれを告げ、差別する心が罪であることを教えられました。しかし、わたしたちが今なお、韓国・朝鮮人に行っている差別を覚え、懺悔いたします。どうか、今から後、すべての国の人々が皆、主の大きな愛を悟って、互いに親しく交わり、正義と公平を保って共に御国の民になれますようにお導きください。尊い血で隔ての壁を取り去ってくださった主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

本来、お互いが尊重し合うための、愛の法律が、人々を分け隔てさせてしまうようになった、人間の制度に血が通っていないことへの、イエス様の怒りに通じるものが、今回の出来事の中にもあるように思えたのです。

私たちは、もう一度、私たちの中にある、人々を幸福にさせるためにできたはずのものが、人間を不幸にしてしまっているものがあるのではないか。イエス様が、今、目の前におられたら、どんなことに怒られるだろうか、と考えると、私たちの生活を見直したいと思います。

そして、人々を幸福にするはずの教会が、人々を苦しめていることはないか、考え直してみたいのです。